ミツカン水の文化交流フォーラム2006

「里川宣言～みんなの利水・治水・守水～」
2006年10月31日 開催

里川は、いわば「使いながら守る川」ですが、その仕組みは、人が暮らす場・生業・時代などに応じてさまざまな姿となって表れます。本フォーラムでは『里川の可能性ー利水・治水・守水を共有する』の出版を機に、「利用しながら守る川、すなわち里川という視点」について討議し、今、求められる里川像についてディスカッションを行ないました。

【テーマセッション】

「多自然川づくりの意味」 島谷幸宏　九州大学教授

「環境史から見た川利用と都市」 小野芳朗　岡山大学教授

「水ー利用の論理・技術の倫理」 鬼頭秀一　東京大学教授

「里川の思想」 鳥越皓之 早稲田大学教授

【パネルディスカッション】

「里川という枠組で、どんな川をつくりたいか？」

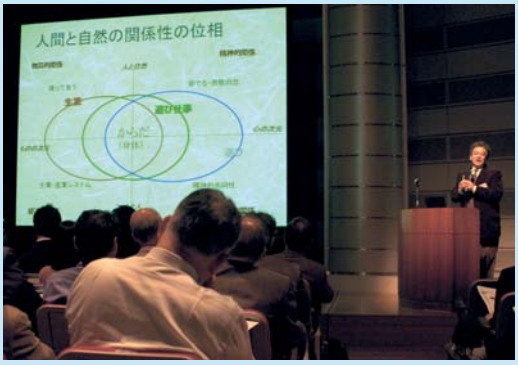
コーディネーター：陣内秀信　法政大学教授

テーマセッション

島谷幸宏さんは、長年にわたり多自然川づくり、すなわち「環境と治水と利水が一緒になった川づくり」を進めてきた立場から、「川は一つひとつ違うので、個性を考えねばならない。さらに、住民参加や合意形成を基本とすることが今後の川づくりの基本になる。それは里川づくりと同義だ」と指摘した。その上で「川は変わるから美しい。川が自分の力で自分を形づくる。そこに人間が少しお手伝いをする。これが美しいということです」と多自然川づくりの心を紹介した。

小野芳朗さんは、岡山市の西川用水、後楽園の早乙女踊り、京都の堀川などを紹介し、水にまつわる記憶の再生、意味づけにより排水路が里川化したり、かつての里川が排水化する例を提示した。そして「川の自発的な歴史の始まりを後押しするような論理があるか」と問い、「モノと記憶が交錯するような艶っぽい空間を演出することが重要なのではないか」と述べた。

鬼頭秀一さんは、環境倫理学の立場から「人間と自然の関係」「利用と管理主体との関係」に言及した。「遊び仕事（minor subsistence：副生業）」が身体的記憶には重要で、これができる場が里川、里山や里海といった、子どもたちが自然とかかわれる場所であると指摘した。しかし現代では、生産力が重視されるに従い遊び仕事領域が減少している。遊び仕事領域を復権させ、川を利用することが必要であろうと指摘した。さらに「利用と管理は不可分」とした上で「望ましい自然、きれいな自然という価値が共有された社会的共同性をどうやって復元するかが問題になる」と述べて、「技術の倫理とは、水とのかかわり合いを取り戻す方法を考えること」で、結局は「生活知を蓄積し、参加に意味を見出すことが、里川を甦らせることにつながる」と結論づけた。



鳥越皓之さんは、吉本ばなな氏の小説を引用しながら「川の持っているゾッとするような怖さ」から目をそらすべきではないと述べ、現在の川自身が持っている歴史や有り様を一度受け入れてみることが必要と指摘した。また里川の思想とは、社会的な公共性を重視する共和主義の上に成り立つもので、現在は管理の曖昧な空間をどうするか知恵を出し合っている状態だ。ただ、その方向性を打ち出せるまでには、まだ20～30年はかかるのではないかと述べた。

ディスカッション

コーディネーターの陣内秀信さんが、フロアからの質問も紹介しながら、議論が展開された。

「その場にふさわしい川をつくる」「川の個性を大事にする」という立場は、程度の差はあれ共通するもの。むしろ論点はその先で、例えば、「三面貼りの川や高速道路のかかった日本橋川の持つ歴史も守るべきものではないのか」といった意見や、「どういう川がいいのかというイメージは時代に応じて変わるのではないか」という踏み込んだ議論がなされた。

さらに、「現代の共同性をどうつくり直すか」という問題については論者の立場が異なったため、「住民による合意形成」の方法と評価にも微妙な意見の違いが生まれた。この結果ディスカッションは、現代における里川「利水・治水・守水」づくりの課題と多様な方向性を示すことになった。

詳細については、当センターホームページにて公開しておりますので、そちらをご覧ください。

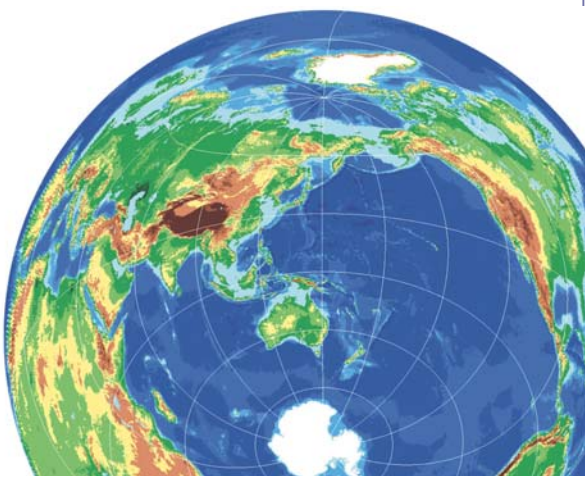
アンケートに寄せられたコメント

◆里山、里川的なものの価値について関心のある人が、思ったより多いことを感じた。
◆単に川の自然を取り戻せばよいという内容ではなく、自分たちの生活や考え方も里川を形成していくには欠かせないという考えに同感した。
◆造園技術者の立場としては、水と緑のかかわりについて示唆を受け、今後の可能性が広がった。特に住民との管理を通じたかかわりの重要性を感じた。
◆里川、良い響きですね。子どもたちに残してやりたいと痛感しました。
◆行政の技術者として、川の管理の方向性が見えてきた気がする。
◆川づくりだけではなく、社会の有り様、教育の有り様に向けても提案していけるような、奥の深いところへ歩を進められる内容であったと思います。
◆経済学の議論が加わると、また変化があったと思います。
◆里川の整備の手法（プロセス）をうかがいたいところもある。

■水の文化26号予告

特集「２１０７年」(仮)

深刻化する地球温暖化。
21世紀末の平均気温が、
1980年から1999年までに比べ
最大2.4〜6.4℃上昇する
可能性があるといわれています。
100年後の水文化は
どのように変わっているのでしょうか。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください
本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。
ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合せ欄をご利用ください
http://www.mizu.gr.jp/

水の文化 バックナンバーをホームページで
本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。
すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク　冬の登場者
当センターホームページ・水の文化人ネットワークコーナー。
以下の方々を順次アップロードする予定です。

堀　　繁　東京大学アジア生物資源環境研究センター教授
早川和男　長崎総合科学大学教授・神戸大学名誉教授
藤田紘一郎　人間科学大学教授・東京医科歯科大学名誉教授
佐竹弘靖　専修大学ネットワーク情報学部教授

編集後記

◆近くの日本橋川の水面を眺めていると、遠く昔の舟運の風景がよみがえる。船主や商人の、荒波を乗り越えてでも、商機を逃さない勇気と逞しさに敬服する。彼らのおかげで、昆布や鰹節の「出汁」の素晴らしさが拡がり、当時の庶民の暮らしはもとより、現在の日本料理にも大きな影響を与えたに違いない。(新)

◆江戸時代の地図と現在の地図を見比べてみて、いま自分が生活している場所の下に、かつて川が流れていたことを知る。今はもうないその川でたくさんの舟が行き交い、様々なモノが取引されていた時のことを想像してみると、見慣れた景色が少し違って見えてくる。(百)

◆バンコクのチャオプラヤ川の川のほとりで、ビールを飲みつつぼーっとしているのが好きだ。色々な荷物を積んだ船が通るのが目に映る。どこからどこへ行くんだろう、昔もこうだったのかな、と思いを巡らすのは私だけではないだろう。これからは、そんなときにこそ「舟運気分」になってみよう。(ゆ)

◆日本橋や船場が醸し出す魅力と秩序。それは舟運と取引と商人のパワー、これらの資産であったことが実感できた。では自動車はそのような資産を残せるのだろうか。(中)

◆我が家では、食器洗いに粉石鹸を使っている。生活協同組合の先輩が「液体洗剤は無駄な水分を運んでいるのよ」と言った言葉が忘れられないからだ。不要なものは運ばないという選択は、些末な日常生活の中に隠れている。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌
水の文化
第25号

ホームページアドレス
http: //www.mizu.gr.jp/

※ 禁無断転載複写

発行日　2007年（平成19年）2月
企画協力　沖 大幹　東京大学生産技術研究所助教授
古賀邦雄　水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信　法政大学教授
鳥越皓之　早稲田大学教授
編集　秋山道雄　新美敏之　百瀬友美　小林夕夏　辻美代子
中庭光彦　緒方大輔　浅野恵子　賀川一枝　賀川督明
発行　ミツカン水の文化センター
〒104 - 0033　東京都中央区新川 1-22-15 茅場町中埜ビル9F
株式会社ミツカングループ本社　社会・文化活動センター内
Tel. 03 (3555) 2607　Fax. 03 (3297) 8578
お問い合わせ　ミツカン水の文化センター　事務局
〒143 - 0016　東京都大田区大森北 2 ー2 ー10・4F
Tel. 03 (5762) 0244　Fax. 03 (5762) 0246

PRINTED ON RECYCLABLE PAPER.